

講演

最新映像で見るイラク戦争の実像

西谷文和

私は二〇〇三年一月から二〇〇八年三月まで、八度にわたってイラク取材を敢行した。実際にイラク入国に成功したのが六回。つまり「八打数六安打」であるからイチローの打率よりは勝っている。二〇〇七年五月に本学で行った授業では、「イラク戦争の実像」「映像で見る戦争被害」「戦争の民営化」などを中心に、約一時間半にわたって講義させていた。だいた。

講義ではまず、二〇〇七年三月に撮影したイラクの最新映像を放映した。第一のテーマは「劣化ウラン弾」。イラク北部スレイマニア市の大学病院を取材した模様が、スクリーンに大写しになった。スレイマニアは比較的治安が安定している、イラクでは例外的な地域である。したがってバグダッドやティクリート、バクーバなど、激戦地からがん患者が多数運び込まれてくる。また一九八八年にサダムフセインが使用したサリンガス、マスタードガスなどの化学兵器の後遺症と思われるがん患者も多数やつてくる。劣化ウラン弾と毒ガス、二種類の悪魔の兵器による被害者が多数やつてくるのが、スレイマニア大学病院の特徴である。

入院患者のほとんどが子どもだった。二歳のアブドラ君は悪性の白血病。米軍が最も激しく空爆を続けているバクーバ市の出身。免疫機能が失われているため、薬治療ができない状態。「薬が届かなければ、この子の生存確率は〇%、日本やドイツの良質な薬が入ってくれば、二〇%」とアリー医師。ここスレイマニアには国連や赤十字はもちろん、人道支援のNGOもない。アリー医師によると「最近、バクーバからたくさんのがん患者がやってくる」そうだ。原因として劣化ウラン弾が疑われる。

イラク戦争後、劣化ウラン弾による環境破壊が取り沙汰された。イラクは治安が悪いので、放射線の専門家も、疫学調査する医師もない。「ただ、たくさんの子どもが死んでいくだけ」だ。イラク南部の都市バスラ市では、一年間に五千人もの子どもが死んでいるという報告がある。一刻も早く劣化ウラン弾の使用を、国際的に禁止させねばならない。

二つ目のテーマは「クラスター爆弾」である。クラスター爆弾は別名「チャイルド・キラー」と呼ばれている。不発弾がおもちゃの形状をしているタイプなどもあり、間違えて触れてしまい、犠牲になる子どもが後を絶たない。二〇〇六年七月、イスラエルとヒズボラの戦いが始まった。停戦直前の三日間で、イスラエルは約一二〇万発に及ぶクラスター爆弾を、ヒズボラの本拠地であるレバノン南部にばら撒いた。その一カ月後、私はレバノン南部のカブリーハ村を訪れた。

何の変哲もない農家の裏庭にクラスター爆弾の不発弾が転がっている。農



クラスター爆弾の不発弾を踏んでしまった農夫

家はオリブ畑の中に建っているのだが、農夫は危なくてオリブの収穫ができない状態。不発弾処理チームと一緒にオリブ畑に入る。金属探知機が鳴る。みればオリブの木の根元に、不発弾が不気味に転がっている。近づいて写真を撮ろうとすると、「ストップ！」と声がかかる。よく見ると、不発弾には白い布が付着している。これはパラシュートの痕跡。空中でパラシュートが開き、わざと不発弾になる仕組みなのだ。

クラスターとは「ブドウの房」という意味。二メートルほどの親爆弾が空中で爆発。中から数百個の子爆弾が飛び出して、地上で爆発。子爆弾には無数の鉄片が詰まっていて、その鉄片が人体に突き刺さるといって、残酷な兵器である。子爆弾の中に一〇%ほど、パラシュートで落ちてくるものがあり、それが大量の不発弾として大地に残る。戦争が終わり、それを拾って遊ぶ子どもが傷つき、農夫が踏み、羊が踏んで傍にいた羊飼ひ（ベドウィン）が傷つく。

最近になって国際的なクラスター爆弾禁止条約が結ばれようとしている。わが日本は？日本では二社がクラスター爆弾を製造しており、自衛隊が所持している。このことについて見解を求められた久間防衛庁長官（当時）は、「海岸線の長い日本では、敵の攻撃に備えてクラスター爆弾が必要だ」と強弁した。馬鹿なことを！クラスター爆弾は、建物を壊さずに人間を殺傷するため開発された、攻撃用の兵器である。自衛隊が「専守防衛」の軍隊なら、クラスター爆弾は要らないはずだ。

アリー君（四歳）はファルージャ出身。二〇〇四年一月、米軍はファルージャ総攻撃を敢行。わずか一ヶ月で六千人を越える市民を殺害。空爆とそれ



アリー君はサッカーボールと間違えて蹴ってしまった

に続く地上戦で、無辜の市民が殺されていった。空爆が終わり、アリー君は兄たちとサッカーをしていた。ボールと間違えて蹴ったのが：不発弾だった。父は慌てて病院に連れて行く。しかしフアルージャの病院には医療器具も薬も手術を執刀する医師もいなかった。病院をたらいまわしにされバグダッドまで運ばれ、ようやくバグダッドの病院で手術したのだが、左手と左足を失ってしまった。劣化ウラン弾に勝るとも劣らない残酷兵器、クラスター爆弾。ここ数年でこの爆弾を使用したのは米軍とイスラエル軍だ。イランやシリア、北朝鮮がこのような兵器を使うと国際社会は大騒ぎするのだろうが、米軍とイスラエル軍に関しては、メディアはあまり騒がない。極めて不公平な報道が続いているといっても過言ではない。

第三のテーマは、「フセインとアメリカの本当のつながり」である。多くの日本人は一九九一年、湾岸戦争後のフセインしか知らない。実はフセインはアメリカはじめ西側が作り上げた独裁者だということを、歴史的に認識する必要がある。

サダム・フセインが大統領になったのは一九七九年。この時、彼は四〇歳を越えたばかり。青年大統領の誕生だった。この一九七九年は中東において激震が走った年で、まず旧ソ連がアフガニスタンに侵略を始めた。旧ソ連はその後一〇年にわたるアフガン戦争で疲弊し、国家崩壊につながっていく。

そしてイランにおけるイスラム革命が勃発したのも一九七九年だ。それまでのイランはアメリカの同盟国。パーレビ王政のもと、イランは「ペルシャ湾の警察官」であった。しかしこの年、アメリカの支配に反発する民衆が蜂起する。民衆の蜂起は全土にわたって巻き起こり、磐石に見えたパーレビ王政がもろくも崩れ去る。パーレビ国王に代わって政権の座に着いたのが、イスラム原理主義のホメイニ師だった。

このイラン・イスラム革命は周辺国に多大な影響を与えた。特にイラク、クウェート、UAE、サウジアラビアなど

の湾岸諸国に住むシーア派イスラムが、「イラン革命に続け」と蜂起した。イランはシーア派の国。ホメイニ師はイランから武器を供給し、革命に立ち上がった民衆を支援する。

この事態にアメリカと湾岸諸国は頭を抱える。イラン・イスラム革命が湾岸諸国に波及すると、巨大な石油利権が民衆の側に奪われてしまう。特にサウジ、イラクは石油埋蔵量でナンバー1、2の位置を占める。アメリカと湾岸の首長国はこのイスラム革命の波を食い止めるために、大統領になりたてのフセインを利用する。「イランは革命をしたばかりだ。軍隊も弱っている。今なら勝てる。戦争を仕掛け、イランを叩き潰してアラブ民族を守るのだ」（イラクまでがアラブで、イランはペルシヤ民族）。

アメリカと湾岸諸国の要請に基づき、若きフセインは、一方的にイランに戦争を仕掛けていく。こうしてイラン・イラク戦争が始まった。戦争当初こそ、イラクが優勢だったが、自力に勝るイランが次第に盛り返す。いつしか戦場はイラン側からイラク側へと攻め込まれ、フセインの軍は敗退しそうになる。この時、フセインに武器を供給したのがアメリカである。一九八三年にラムズフェルドがフセインと面談している。おそらくこの時、アメリカの武器がイラクへ入ることになったのだろう。さらにアメリカは人工衛星から、イラン軍がどこに集結しているのか、などの貴重な情報をイラク軍に流し続けた。

アメリカのサポートでサダム・フセインの軍隊は息を吹き返す。戦闘は一進一退を繰り返して、泥沼化する。この戦争は八年も続き、双方多大な犠牲者が出る消耗戦へと移っていく。戦争末期の一九八七年、イラン・イラク国境地帯に住むクルド人たちが「打倒フセイン」で立ち上がった。クルド人は「自国を持たない世界最大の少数民族」と呼ばれており、フセインから弾圧されていた。国境付近のクルド人はイランから武器をもらってフセイン軍と戦うようになる。イラン、クルド双方から攻められてはかなわない。一九八八年、あせったフセインは立ち上がったクルド人に

毒ガス兵器を使用。「イラクのヒロシマ」と呼ばれるハラブジャでは、毒ガス兵器によって一瞬にして五千人、後の手当てもむなしく三千人、合計八千人もの人々が毒ガスによる大量破壊兵器によって虐殺されたのだ。

イラン・イラク戦争はこのようにして勝者なきまま終結する。

この時フセインは間違いなく、毒ガスという大量破壊兵器を所有していた。所有どころか実際に使用したのだ。しかしアメリカはフセインを非難しなかった。当時、「フセインはアメリカ側」にいたからだ。

八年もかけた戦争が終わった。しかしフセインは不満だった。戦争で多額の借金を抱え、早急に国の建て直しを図らねばならなかった。建て直しの方法は、イラクに眠る原油だ。この原油を売りさばき、多額の借金を返済し、疲弊した国民生活を潤さねばならない。

あせるフセインをあざ笑うかのように、クウェート、サウジ、UAEが石油をどンドン掘り出す。当然原油価格は下げ相場となり、当てにしていた石油収入がイラクに入つてこない。その上フセインの言葉を借りれば、「クウェートが自国のルマイラ油田を地下から忍び込んで、盗掘している」疑惑が発覚。

フセインはクウェートとの南部国境に軍隊を集結させる。今にもクウェート侵略かという、一九九〇年七月三〇日、アメリカは大使グラスピーをフセインの元に派遣する。グラスピーは「イラクとクウェート、つまりアラブとアラブの関係については、アメリカは口出ししない」と明言した。

「アメリカがG.O.サインを出してくれた!」。フセインはその四日後、つまり一九九〇年八月三日、クウェートを侵略。「もともとクウェートはイラク・



ハラブジャでは化学兵器で一瞬にして5000名もの人が虐殺された

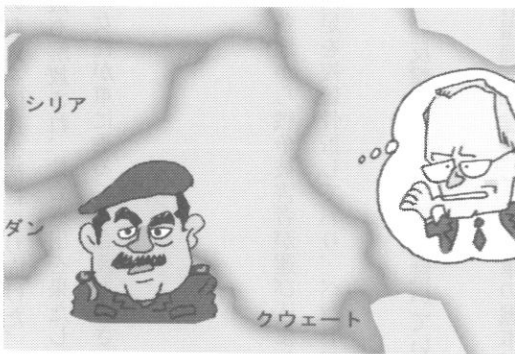
バスラ洲の一部である」という理屈で。

「イラクがクウェートを侵略」という臨時ニュースが世界を駆け巡った頃、アメリカの父ブッシュが「フセインは独裁者である。このような侵略行為を見逃すわけにはいかない」と、イラク攻撃を示唆。多くの人々が知っているフセインは、この年以後の「独裁者フセイン」である。

やがて多国籍軍が結成され、湾岸戦争に突入。アメリカはままと国際社会を戦争へ持つていくことに成功した。イランイラク戦争、そして直後の湾岸戦争で武器メーカーは笑いが止まらなかつた、だろうと想像する。テーマ第一で取り上げた、劣化ウラン弾はこの時初めてイラク南部で使用されたものだ。

湾岸戦争中、実はフセインはSOSを出していた。それは「我々イラクが『クウェートを侵略した』というのならイスラエルはどうなのだ？イスラエルはパレスティナを侵略し、占拠しているではないか」というもの。続いて「イスラエルがパレスティナの地から撤退するなら、イラクも撤退する」というメッセージである。これはアメリカのダブルスタンダードを正面から突いたものだ。しかしメデアはこの時「フセイン悪玉論」に占められていたので、イスラエル問題をこの問題にリンクさせて両者の同時解決を図る声はかき消されてしまった。

湾岸戦争、そしてその後続く国連の経済制裁、さらには二〇〇三年からのイラク戦争を考える際、中東地域の歴史を紐解いていかないと、現象を見誤ることが多々ある。確かにフセインは独裁者であり、毒ガスを使用した虐



フセインは西側世界が作り上げた独裁者だ

殺者でもある。しかし同時にフセインはイラクの石油をいち早く国有化し、その収入を国民生活に振り向けた。イラクでは長らく、教育費は大学まで無料、医療費も無料、女性はイスラム圏では最も解放され、社会進出を果たしていた国だった。サウジやクウェートではいまだに飲酒は許されず、サウジなどでは女性が車に乗ることさえも許されない。このような「窮屈な」国ではなかったのだ。

では二〇〇三年イラク戦争後のバグダッドはどうなったか？

講義では「米軍の戦争犯罪」を、映像を流しながら具体的に語った。

イラク北部スレイマニア市は例外的に治安が安定している都市なので、イラク各地から戦争被害者が運び込まれてくる。「戦争被害者のための緊急病院」で出会ったアーヤちゃん（一二歳）は両足を複雑骨折しており、ベッドで泣き叫んでいた。

アーヤちゃんは激戦地バクーバの出身。バクーバでは米軍の空爆と武装勢力の反撃が、もう三年も続いている。アーヤちゃんは米兵に背後から狙撃されていた。

二〇〇七年一月二五日、小学校から下校途中、道路に仕掛けられていた「路肩爆弾」が爆発した。米軍の戦車、装甲車を狙ったもので、幸いその時、米兵には死傷者が出なかった。しかしこのような攻撃があつた場合、米兵たちはクレイジーになる。「周囲にテロリストがいるはずだ！」米兵は狂つたように銃を乱射。その中の一発がアーヤちゃんの足に命中したのだ。Why?（なぜだ）This is children（子どもじゃないか）ベッド脇に付き添う父が、米軍への怒りを口にする。イラクでは毎日のように、罪なき人々が戦闘に巻き込まれて犠牲になつている。私の脳裏には悲しそうな父の顔が焼きついている。そしてWhy?の声がいまだに耳に残っている。

アメリカが実際に行っている戦争は「テロとの戦い」である。テロリストは市場に潜んでいるかもしれない、病院

に隠れているかもしれない、あるいは学校に逃げ込んでいる可能性もある…。つまり人々の生活の場が戦場となる。これに自爆テロが加わる。アルカイダなどのテロリストも「人が集中する場所」を狙ってテロを敢行する。祈りのためにモスクに集まる人々、フリーマーケットで買い物する人々などがやられる。普通のイラク市民にとっては「米軍もアルカイダもイラクから出て行け！」というのが切実な声である。

シリアの首都ダマスカスは人口四〇〇万人程度の都市であったが、イラク戦争後、難民が急増。その数二〇〇万人といわれている。当然都市はパンクする。街には失業者が溢れ、道路は慢性的な渋滞、今やダマスカスの中心部は、「歩く方が早い」状態である。

そんなダマスカスに一人の少年がひっそりと暮らしている。ディア君（九歳）の背中を見た時、私は言葉を失った。ディア君の背中は大きくくぼみ、背骨は折れ曲がっている。

二〇〇五年七月、小学校への登校途中、米兵の「気まぐれ発砲」を背中に受けてしまったのだ。銃弾は身体に入ってから爆発するタイプだった。彼の体内にはいままた五〇を越える破片が取り残されている。銃弾は背骨の中の神経を損傷させ、彼は下半身不随となった。サッカーが好き少年は学校に行かなくなった。校庭でサッカーをする友達を見ることに耐えられないのだ。

父親はイラクの裁判記録を持っていた。イラクの裁判所が米兵の犯罪を証明している。証明書には英文タイプではつきりと、「この子どもは占領軍兵士に撃たれた。そして下半身不随になった」と書かれていて、裁判所の印まで。



米兵の銃撃で下半身不随となったディア君

間違ひなく「公式記録」があるにもかかわらず、米軍は銃撃したことすら否定し、ディア君家族に何の補償もしていない。父親は車と家財道具を売り払って、ディア君の治療費とシリアへの旅費に充てたが、お金も尽きた状態だった。二〇〇万人もの難民で溢れかえるダマスカスでは、まともな仕事に就けないのだ。

この例は非常に分かりやすい米軍の戦争犯罪だと思う。日時と場所を特定できているのだから、その気になれば人も割り出せるだろう。要はイラク政府と米軍がその気にならないだけの話である。一九九五年、沖縄で少女が暴行されたとき、日本では米軍に対する怒りが湧き上がった。今のイラクはもつともつと大きな怒りがマグマのように溜まっている。アメリカの占領政策は全くの失敗だった。「これならフセイン時代の方が良かった」「アメリカは『自由を手渡す』とやって来た。アメリカが俺たちにくれた自由は、『人を殺してもよい自由』『誘拐して身代金をせしめても捕まらぬ自由』だった」。私の通訳は、フセイン後のイラクを、このように表現する。フセイン、バッド（悪い）。アメリカ、ワースト（最悪）と。

以上のような内容を、現地報告として講義した。その後、二〇〇七年一〇月にイラク入りに成功したので、最新の状況を報告しておきたい。

今回もイラク北部スレイマニア市を拠点として、取材活動を続けた。石油都市キルクークでは連日のようにテロが起こっていた。

キルクークは石油で有名な町。この油田を巡る利権争いが激化している。キルクークはもともとクルド人地域であったが、サダムフセインがこの油田を手中にしようと、シリア派アラブ人を移住させた（アラブ化政策）ため、今では、スンニ派、シリア派、クルド、そしてトルコマンなど各民族が混住する。二〇〇三年のイラク戦争後、イラク

北部にクルド自治政府が確立され、俄然クルドが有利な立場に。それまで指導的立場であったスンニ派が利権を失い、人口で上回るシーア派が食い込む…。この状況で治安が安定するはずがなく、キルクークでは連日のようにテロが発生、互いの民族がそのテロに報復という「憎しみと暴力の連鎖」に陥っている。

キルクーク病院は野戦病院と化していた。廊下には病室から血が流れ出している。訪問の前日、三〇代の男性がテロリストに狙撃され、翌朝息を引き取ったばかりだった。二階の病室にムラート君（一三歳）がいた。彼は一〇月一二日、ラマダン明けの祭り初日、市場で遊んでいたときにテロに遭った。彼の右目は失われ、胸には爆弾の破片が突き刺さり、あごの骨は砕け散っている。「アウー、アウー」とうめくムラート君は危篤状態だった。日本からの支援金があったので、この子をスレイマニア大学病院へ移送した。キルクーク病院には薬もなく、技術のある医師も逃げ出しているの
で、スレイマニアに移送しなければ死んでしまうと判断したのだ。

現在彼は、全身やけどの治療中である。その後、胸に突き刺さった破片の除去手術、さらにはあごの骨を固定する手術、最後に右目の手術である。医師は「一年は入院せねばならない。相当なトラウマを受けている。この子の人生は暗いものになる」と首を振った。

これはアルカイダ系テロリストの自爆だった。主に子どもを狙い、四人の死亡者が出た。二〇人の負傷者のうち最も重症だったのがムラート君だ。「友人の友人がアルカイダ」などと「自慢」した政治家がいた。このような政治家が国会で「テロとの戦い」を口にし、新テロ特措法を通過させてしまった。



ムラート君を救急車で移送する

演

一度でもこのテロの現状を見てみる、と言いたい。少なくとも、二〇〇三年のイラク戦争までは、イラクではテロは起こらなかつた。全てのテロがアメリカの侵略戦争後に勃発している。このような戦争を起こしたアメリカの責任を追及せずに、ひたすら奴隷のようにアメリカに協力を続ける日本政府。

講

「イラク戦争の悲惨さが分かりました。それで私たちにできることは何でしょうか？」と質問されることがある。イラク人が最も喜ぶこと、それは葉を配ってあげることでも、学校を建ててあげることでもない。それは「戦争状態を一刻も早く終わらせること」だ。そのためには米軍を撤退させなければならぬ。米軍を撤退させるためには、そのような戦争に協力しないことだ。つまり航空自衛隊を撤退させること、そのために、今の政府を変えることである。私たちにできること……。それは遠い世界の戦争だ、と無関心になるのではなく、一人でも多くの命が救われるように、普段のニュースに関心を持ち、そして選挙などで平和な世界を実現する方法を自分なりに考えた上で、棄権せず、投票すること、なのだと感じる。

この戦争実態を目の当たりにした学生諸君が、今後関心を持って、様々なニュースに接してくれて、互いに議論しながら、自分自身で学習してくれることを期待する。